

『その頬、熱線に焼かれ』用語説明

※劇中には出て来ないものもあります

被爆女性の治療渡米 昭和20年代の広島では、原爆による重いやけどによるケロイドに苦しむうら若き女性が沢山いた。その心の救済と連帯の為に、流川教会の谷本牧師によってシオンの会が発足する。救済の理念はやがて、市民運動となって東京・大阪での治療、更には世界一の医療先進国アメリカでの治療へと発展する。アメリカではジャーナリストのノーマン・カズンズが中心となり、クエーカー(キリスト教の一派)やユダヤ系団体の人々を動かし、市民の善意として被爆女性の受け入れが行われた。ヒロシマガールズ、ヒロシマメイデンと米国で呼ばれた彼女たちは、日本でも原爆乙女と呼ばれ注目を集める存在となった。1955年5月25人が渡米。ホームステイで日常を送り、数人ずつがマウント・サイナイ病院に入院して治療にあたった。翌年6月に第一陣9人が帰国。11月に残り14人が帰国。渡米中に一人が死亡、一人が日系人と結婚して残留した為に、23人の帰国になった。誤解されがちだが、彼女たちの受けた治療は美容整形ではなく、あくまでも機能回復の為に形成外科手術である。選考はアメリカと広島の医師が合同で行った。周知はされていなかったが、心身ともに健康であることや、あくまでも機能回復が望める者であることといった選考基準が存在した。

治療渡米に関わった人物

ノーマン・カズンズ アメリカ人ジャーナリスト、作家。1949年、被爆わずか4年後の広島を訪問。広島戦災児育成所での原爆孤児に衝撃を受ける。生涯を通じ、被爆者救済・核兵器廃絶運動に取り組む。被爆女性の治療渡米における米側の責任者。様々な活動で米国市民に支援を訴え、ついに全て善意の寄付により治療渡米を成功させる。広島市名誉特別市民の称号を受ける。

横山初子 米国生まれの日本人女性。英語を生かし、広島の原爆傷害調査委員会(ABCC)に勤務していたところ、通訳として治療渡米への同行を求められる。被爆女性たちの様子に心を打たれ、退職し、夫と子供二人をおいて、付き添いの為に渡米する。「先生」「本当の恩人」と慕われる。

ドクター・バースキー マウント・サイナイ病院の外科部長。アメリカの形成外科手術の第一人者。治療渡米における手術を担当。百三十回を超える手術を一切無報酬で行う。

谷本清 広島流川教会の牧師。自身も被爆者であり、1946年作家ジョン・ハーシーの著書『ヒロシマ』でその被爆体験が紹介され、1949年からの渡米に繋がる。15か月間、31州256都市で講演を行い

広島の惨状を訴える。その後、被爆した少女・孤児の救済活動や平和運動に生涯を捧げる。治療渡米の日本側の責任者。没後『谷本清平和賞』がヒロシマ・ピース・センターにより創設される。

原田東岷 広島の外科医、平和運動家。軍医として終戦を迎え、翌年復員。爆心地の近くにバラックで外科病院を作り、治療を開始する。後に日本における形成外科の草分け的な名医となる。ケロイド治療の第一人者であり、治療渡米にも同行する。原爆医療法の制定でも、中心的な役割を担う。

その他の事柄

ピカ(ピカドン) 原子爆弾の俗称。閃光(ピカ)と爆音(ドン)を即物的に表現したもの。

ケロイド及び原爆による外傷後遺症 原爆爆発時の強烈な熱線により、深部に達したやけど痕が肥厚化したもの。顔や手足の可動部にできたものは日常生活の大きな障害となった。単純に切除しただけでは再発するので難治である。顔の引きつりによる、瞼や口の開閉の不自由。皮膚同士の癒着による、首・腕関節・手指・足の不自由等、様々な機能不全が原爆による外傷で引き起こされた。

原爆症(原爆病) 原爆によって生じる健康障害の略称。放射線障害。発症は被爆直後が多いが、10年後20年後に発症するケースも少なくない。被爆直後は健康に見えた人の容体が突如悪化して死亡する例が多々見られた。白血病や癌を発病することも多い。

シオンの会 広島流川教会に集まった独身被爆女性の会。名前は讃美歌の一節から。被爆女性の心の安らぎと自立の支援を目的に活動。会の活動が彼女たちの心の支えとなり、やがては治療渡米へと発展する。

クエーカー キリスト友会の一般的な呼称。キリスト教徒の中でも強く平和主義を訴える一派。多くのアメリカ人クエーカーが治療渡米に協力した。寄付やホストファミリーとなることを通じて、彼女たちを援助した。

マウント・サイナイ病院 ニューヨーク市マンハッタンの大病院。ユダヤ系の病院であり、同じユダヤ系のノーマン・カズンズの働き掛けに応え、無償で治療を引き受けた。

『その頬、熱線に焼かれ』関連年表

1898年

キュリー夫妻により放射性物質が発見される。

1933年

シラードが原子爆弾の理論的な可能性を提案する。

1939年

第二次世界大戦勃発。ヨーロッパのトップ物理学者の多くがアメリカに渡る。

1941年12月7日

真珠湾攻撃により太平洋戦争勃発。4日後ドイツも対米宣戦布告。

同年12月18日

アメリカ、核分裂兵器の開発を決定。

1942年10月

ルーズベルト・アメリカ大統領、核兵器開発計画いわゆるマンハッタン計画を承認。

1945年5月

原爆目標策定委員会により、原爆投下の目標となる日本の都市がリストアップされる。

同年7月16日

アメリカ、世界初の核実験を行う。

同年7月25日

アメリカ空軍、広島、小倉、新潟、長崎のいずれかに8月3日以降に原爆を投下するよう命令。

同年8月6日午前8時15分

広島に原爆投下。この年の終わりまでに9万人ないし12万人が死亡した。

同年8月9日午前11時2分

長崎に原爆投下。約7万4千人が死亡した。

同年8月15日

終戦の詔勅。太平洋戦争終結。

同年9月8日

アメリカ軍による原爆災害調査が開始。

同年9月19日

GHQにより、原爆被害に関する報道は禁止される。

1946年1月

広島市復興局が開設。資金難により復興進まず。

1947年3月

原爆傷害調査委員会(ABCC)がアメリカにより開設。目的はあくまで調査であり、一切治療はされなかった。

1948年10月

広島市の流川教会牧師谷本清、渡米。15カ月で256都市で講演を行い、広島の惨状と平和を訴える。

1949年8月

世界的ジャーナリスト、ノーマン・カズンズが広島の惨状を視察。強い衝撃を受ける。
これを契機に谷本牧師と共に原爆孤児に対する支援を開始。アメリカで寄付を募り400名以上の孤児に対して支援を実施。

1950年8月

谷本牧師、カズンズと協力してヒロシマ・ピース・センターを設立。被爆した若い女性達の救済活動にも取り組む。

1951年8月

谷本牧師、流川教会にて、被爆女性同士の連帯と自立の為に「シオンの会」「原爆被災者自力更生会」の二つを発足。この両会の活動が後の治療渡米に繋がる。

1952年6月

谷本牧師の訴えが市民運動の発端となり、9人の被爆女性が支援を受け、やけど痕ケロイドの治療の為に上京。半年後には12人が大阪で治療を受ける。広島における本格的な被爆者治療再開のきっかけとなる。

同年7月

広島市内の外科医が、被爆者の診察と治療に乗り出す。

1953年1月

医師会を中心に広島市原爆障害者治療対策協議会が結成。

同年9月

カズンズ3度目の広島来訪。谷本牧師やシオンの会の被爆女性と面会。女性たちの治療運動に取り組むことを決意。

1955年4月

カズンズ米国の医師を伴い広島来訪。広島の医師団も加わって、治療渡米の選考を行う。教会グループと共に、新聞・ラジオ等で一般募集の応募者も診察を受ける。

同年5月5日

一ヶ月足らずの準備期間を経て25人の被爆女性が治療渡米に旅立つ。莫大な滞在費は全て米国市民の寄付によって賄われ、渡航費は米軍機を使うことによって免除された。

同年5月9日

一行、ニューヨークに到着。

同年5月11日

谷本牧師、カズンズの肝いりで人気番組である「ジス・イズ・ユア・ライフ」に出演。米国市民に更なる支援を訴える。

同年5月20日

準備期間を終え、この日から数人ずつ、マウント・サイナイ病院に入院。治療が始まる。25人に対して一年半にわたり、延べ百数十回の手術が無償で施される。

同年12月20日

同行していた谷本牧師、帰国。

1956年5月25日

マウント・サイナイ病院にて、手術中に26歳の女性が死亡。

同年6月

治療渡米者第一陣が帰国。

同年11月

第二陣が帰国。一年半に及ぶプロジェクトが終了する。

1957年4月

一連の治療渡米を契機として、日本国内でも被爆者に対する援護の声が起こり、原爆医療法が制定される。